

# 触発する ゴフマン

やりとりの秩序の社会学

中河伸俊・渡辺克典——編

GOFFMANESQUE  
IN THE 21ST CENTURY

ビジネス・看護などの新たな調査の増加とともに再注目されるゴフマン。  
これからの経験的な研究のためには、どのような実用性が見いだせるのか。  
人類学者や言語学者も参加したゴフマンを「使う」ための一冊。

触発する

ゴフマン

やりとりの秩序の社会学

中河伸俊・渡辺克典——編

GOFFMANESQUE  
IN  
THE 21ST CENTURY

---

# はじめに

——触発し続けるゴフマン

渡辺克典・中河伸俊

---

## 1 本書のねらいと特色

アーヴィング・ゴフマンという社会学者は、この国では、その業績の大きさに比して不遇な扱いを受けているとっていいだろう。国外に目を向けるなら、彼の知的遺産への関心と評価は、没後の追悼の時期はもちろんのこと、今に至るまで衰えをみせていない。たとえば英語圏では、2000年代以降、80年代・90年代に書かれたゴフマンについての諸論考を集成した4巻の論文集 [Fine & Smith 2000] が刊行され、彼の社会学についての入門書 [Smith 2006] や研究書 [Scheff 2006], 論集 [Trevino 2003; Jacobsen 2009; Winkin & Leeds-Hurwitz 2013] が、“続々と” といいたくなるペースで刊行されている<sup>[1]</sup>。2014年2月刊行の『*Symbolic Interaction*』誌上ではゴフマンのバイオグラフィー等を掲載した特集が組まれ (37巻1号)、ウェブ上でもゴフマン・アーカイブズ (EGA) が公開されている (第1章参照)。もちろん、英語では彼の著作のほぼ全点が現在も入手可能であり (主要著作の再刊には新たに解題者による序が付けられている)、また、フランス語、ドイツ語<sup>[2]</sup>、イタリア語、スペイン語といった欧米圏だけでなく、中国のようなアジア圏でも翻訳がすすんでいる<sup>[3]</sup>。

ひるがえって、日本では、1980年代から90年代にかけてのちょっと

---

[1] このうち、Fine & Smith [2000], Smith [2006], Scheff [2006] については、第1章を参照のこと。なお、本稿執筆中に Jacobsen & Kristiansen [2014] が刊行された。

したブームのあと、今世紀に入って、ゴフマンの社会学への関心は収縮してきたようにみえる。90年代初頭の『ゴフマン世界の再構成』[安川 1991] の刊行は画期的なものだったし、ヴァンカンによる行き届いた評伝 [Winkin 1988] の邦訳のおかげで (1999年)、ゴフマンの学的な歩みとその個人史的背景を手軽に知ることができるようになった。しかし、彼の著作の邦訳は全11冊のうち半ばの前期の6冊で足踏みしており<sup>[4]</sup>、『儀礼としての相互行為』は改訳され、『行為と演技』『スティグマの社会学』『出会い』『集まりの構造』は再版されて入手可能だが、ゴフマン初期の重要な論文集である『アサイラム』は本稿執筆時点ではまだ再版されていない。さらに、ゴフマンの社会学についての理解が今ほど進んでいない時点での訳業であるためやむを得ない面もあるが、訳書のうちあるものは、手放しで推奨できる水準にあるとはいいいにくい。また、ゴフマンの業績の理論的検討や、彼の概念装置を経験的研究に生かす試みも、ひところに比べて少なくなってきた

---

[2] 各国語での訳書以外に、彼の社会学への入門書がフランス語 [Nizet & Rigaux 2005]、および、ドイツ語 [Raab 2008] で書かれており (前者のスペイン語訳も翌2006年に刊行)、さらに、研究書も仏・独で上梓されている [Joseph 1998; Lübcke 2011 など]。

[3] また、ゴフマン自身の遺産の評価・継承とは別の話だが、彼の娘のアリス・ゴフマンが、その博士論文をもとにして書いた『オン・ザ・ラン』[Goffman 2014] が『ニューヨーク・タイムズ』紙の書評欄で大きく取り上げられるという形で、鮮烈なアカデミックデビューを果たしたことは記憶に新しい。著作の内容は、シカゴ学派のモノグラフの伝統の再興ともいうべき、都市のアンダークラスのアフリカンアメリカンの若者たちのライフスタイルの優れた (しかもきわめて時宜を得た) エスノグラフィーであり、つまり、父親が決してしなかった (シェットランド諸島でのフィールドにもとづく博士論文『アサイラム』も通常の意味でのエスノグラフィーとはいいいにくい) ことを娘がしたともいえる。同書に推薦文を寄せた学派の長老、ハワード・ベッカーが、同門の仲間の娘の研究を読みながら目を細める姿が目につく。

[4] 現在、彼の主著のひとつと目される『フレーム分析』の翻訳作業が進められているという。それがこの国のゴフマン社会学のブレイクスルーのきっかけになることを願いつつ、早期の刊行を待ちのぞみたい。

ているという印象を受ける。

本書の一番のねらいは、そうした現況に一石を投じ、彼の社会学的業績への関心と呼び覚ますための呼び水の役目を果たすことである。この間の日本の社会学の大きな流れのひとつに理論（誇大な？）から調査への軸足の移行があり、それに見合う形で、いわゆる質的調査やエスノグラフィックな探究がクローズアップされるようになってきている。しかし、質的調査の方法論が未成熟な中でそうした動きがすすむとすれば、下手をすれば、海図のない航海（もっと悪くいえば、自儘な知的漂流）の多発をもたらしかねない。このような局面で、都市人類学的なフィールドワークを通じての自然主義的観察（naturalistic observation）という方法に準拠しつつ、人びとの相互行為秩序をテーマに、説得力に富む分析や洞察を数多く提示してきたゴフマンから、私たちが学べることは少なくないだろう。そう考えるとき、この国での現在のゴフマンのネグレクトは、とてももったいないと思われる。

以上のようなねらいにもとづいて編まれた本書の特色として、ここでは取りあえず4つの点を挙げておきたい。(A) ゴフマンの遺産が経験的研究にどのように使えるのか（および使われているのか）という関心に重きを置いて編まれたこと。先行の『ゴフマン世界の再構成』では、ゴフマンの「理論」の解明が重視され、そのエンピリカルな含みについてはあまり論じられなかった。本書では、量的調査に比して「粗野な」質的な調査によってこそ可能になったゴフマンのエスノグラフィックの方法論の特徴とその成果を、具体的なデータ分析を用いて明らかにしようと試みる。(B) ゴフマンとエスノメソドロジー／会話分析（EM/CA）との学的なつながりや違いに目を向けていること。『ゴフマン世界の再構成』にも、また英米の“主流の”社会学者によるゴフマン論の大方〔たとえば Scheff 2006〕にも、彼の社会学と同時代的に発展してきた EM/CA への目配りが少ない。しかし、日常的な相互行為とコミュニケーションの社会学的研究において、ゴフマンが EM/CA の先達であり、また両者の間に入り組んだ相互影響やラ

イバル関係があったことは、いまではよく知られている。本書では、方法論の整備が進んでいる [Francis & Hester 2004; 前田ほか 2007; 酒井ほか 2009] EM/CA をいわば補助線にして、それとの対比から、ゴフマンの方法論上の特徴を明らかにしようと試みる。(C)『フレーム分析』をゴフマンに立ち戻って取り上げていること。このゴフマンの大著は、先行のゴフマン論ではともすれば敬して遠ざけられ、その意義や実用性の十分な検討はまだ行われていない。本書では、フレーム分析の発想の基本的な構図を再確認するとともに、社会運動論やメディア研究などで一定の成功を収めてきたフレーミングの概念を、ゴフマンの本来の企図に沿って、相互行為論の文脈の中に戻す道筋を探る。(D) ゴフマンの遺産の意義を学際的に眺望すること。彼の影響は、社会学だけでなく人類学、言語学、コミュニケーション研究、社会心理学、人間行動学などにも及んでいる。本書では、人類学者と言語学者から寄稿を受け、他の学問分野でゴフマンがどのように受容されてきたかを垣間見る。

## 2 本書の構成

本書は、相互に多方向的につながりあう長短11の論考によって構成されている。そのうち初めの3つの章は、これまでのゴフマン研究の蓄積を咀嚼して書かれた導入部（もしくは入門的なパート）であり、建造物に喩えれば本書全体の基礎に当たる。

第1章の速水奈名子「アーヴィング・ゴフマンの社会学——理論内在的分析と現代的展開」では、ゴフマンの学的なバイオグラフィーと、ゴフマンと古典社会学理論やエスノメソドロジーとの関係が概観されたあと、ゴフマンの理論の5つの特徴（デュルケム的な社会的事実を前提にする、自然主義的観察法をとる、「集まり」を研究対象にする、社会秩序と相互行為秩序を区分する、状況を参照枠にした「逸脱論的」発想）を明らかにする。さらに、彼の記述が修辭的でキイ概念がメタファー的

に使われることが指摘され、さらに、彼をめぐる近年の研究動向が明らかにされる。第2章の渡辺克典「ゴフマネスク・エスノグラフィ」は、前の章でも触れられたゴフマンの記述スタイルの特徴をさらに掘り下げて、ケネス・バークの「不調和によって得られるパースペクティブ」モデルの意図的な利用として位置づける。それは、相互行為秩序の研究という新しい領域の立ち上げの中で当時の科学主義に移行し始めていた社会調査の間隙を縫っておこなうための戦略であり、フィクショナルなものを含む多様な資料を利用する「粗野な経験主義」は、実験室外でおこなわれる実験であったととらえられる。第3章の芦川晋「自己に生まれてくる隙間——ゴフマン理論から読み解く自己の構成」では、ひと頃はとくに自己論の文脈で論じられたゴフマンが、結局「自己 (self)」をどのように捉えていたのかが、「イメージとしての自己」と「プレーヤーとしての自己」という二種類の自己の隙間、およびその隙間を担保する「より広い社会」、といったキーワード群が導く構図に沿って綿密に読み解かれる。

これに続く8つの章では、以上を踏まえて、ゴフマンの理論と方法についての多面的な掘り下げや検討がおこなわれる。第4章から第7章までの4つの論考では、とくにEM/CAの視角を援用もしくは参照しながら、ゴフマンのエンピリカルな研究における使い勝手が吟味される。第4章の鶴田幸恵「「他者の性別がわかる」という、もうひとつの相互行為秩序——FtXの生きづらさに焦点を当てて」は、ゴフマンとガーフィンケルの洞察の両立可能性を、実用を通じて示す試みである。具体的には、公共の場における性別の読み取りという行ないの仕組みが、トランスジェンダー当事者が経験する一瞥をめぐる困惑を手掛かりにして考察される。第5章の平本毅「会話分析の「トピック」としてのゴフマン社会学」では、ゴフマンの「面子作業」と会話分析における選好（優先）構造という発想とのつながりに代表されるような、ゴフマン社会学とEM/CAの類縁関係と相違点を整理し、ゴフマンが経験的な分析の指針となるような「地図」を提供しなかつ

たと指摘したあと、にもかかわらずゴフマンの洞察は、会話分析の“トピック”形成の局面で活かされてきたし、今後も活かされるだろうと示唆する。第6章の中河伸俊「フレーム分析はどこまで実用的か」は、ゴフマンのフレーム分析アプローチの基礎概念を再訪したあと、それを実用しようとするときに直面するいくつかの困難を指摘し、それに対処する方策を探る。第7章の南保輔「引用発話・再演・リハーサル——フレームの複合性と経験の自在性」は、フレーム分析の実用性を例証する論考である。マージョリー・グッドウィンおよび自身による引用・再演・リハーサルの事例から、経験の構造の複合性・重層性が私たちの社会生活の基本的な特徴であり、そうした特徴を解明するのにフレーム分析の発想がきわめて有効であることが示される。

次の2つの章は、都市社会学と医療社会学の研究関心の文脈でゴフマンの遺産の意義や活かし方を検討する論考であり、そして最後の2つの章では、言語学と人類学へのゴフマンの影響が論じられる。第8章の永井良和「「ふつうの外見」と監視社会」では、ゴフマンが「ふつうの外見」や「儀礼的無関心」といった概念によって切り拓いた公共空間における相互行為秩序についての視座が、近代化と都市化の歴史的な過程の考察に有効であることが、近代日本の諸事例を参照しつつ示される。第9章の天田城介「修理屋モデル＝医学モデルへのハマらなさこそが極限状況を招く——アイデンティティの機能的差異をも論じたゴフマン」は、精神病院のフィールドワークにもとづいて著された論集『アサライム』においてこれまで論じられることが少なかった「医療モデル」をテーマにした巻末論文の再評価の試みである。ここでは、ゴフマンが活写した入院患者の「アイデンティティの亀裂」という現象が、精神医療に携わる専門職の活動への「修繕サービス」モデルの適用の一帰結として“機能論的”に考察されていることの画期性が論じられる。第10章の滝浦真人「ゴフマンと言語研究——ポライトネスをめぐる」では、ゴフマンの影響下に生まれ語用論の分野で成功を収めたブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論をゴフマ



ンのフェイス（面子）論と対比しながらとらえ、前者はルーツである後者の視点を平板化するという犠牲を払っており、自己と他者の相互参照的な関係に目配りし対人距離を変動しうるダイナミックなものとして捉える後者には、理論化の難易はともかくより豊かな可能性がある」と指摘される。最後の第11章の高田明「ゴフマンのクラフトワーク——その言語人類学における遺産」では、ゴフマンのパイオニア的な位置が論文「無視されている状況（The Neglected Situation）」で再確認されたあと、社会的状況、関わり（engagement）、参与枠組みという3つのキーワードを手がかりに、チャールズ・グッドウィンやオックス、デュランテ、マージョリー・グッドウィンといったゴフマンの影響を受けた言語人類学者の研究の成果が整理され紹介される。

以上が本書の概要であるが、それに加えて、本書の各章は相互に多方向的につながりあっており、たとえば、第1章で取り上げられた「身体」をめぐる議論は、第4章や第8章と密接に関連しており、また第3章の自己論は、第9章の「アイデンティティの亀裂」の話と重ね合わせて考察することができるだろう。第6章と第7章はもちろんのこと、第7章と第11章も連動している。したがって、読者は、この本の最初から順に読む必要はない。各自の関心に沿っていずれかの章から読み始めて、それと関連する章へ、またそれと関連する章へと行ったり来たりしながら読み進めていただいてもかまわない。

しかしその一方で、紙幅の都合もあり、論じたかったトピックをいくつも積み残すことになった。たとえば、ゴフマンの面子維持作業（face work）論を拡張したホックシールドらの感情維持作業（emotion work）の研究 [Hochschild 1983] や、彼の公共の場面での相互行為秩序についての考え（第8章参照）を応用したガードナーのパブリックハラスメントの研究 [Gardner 1995]、そしてもちろん、スティグマと排除を取り扱う差別論や障害学、身体の社会学などがそれである。そうした積み残しを含めて、本書の不十分さ、不徹底さは、この「一石」がこの先2つ目、3つ目の石を呼び起こすことを通じて補われて

いくだろうと信じたい。

### 3 訳語について

訳語については、人名や定訳など一部の翻訳については統一を  
はかったが、原則として執筆者による訳語を優先した。一部の訳語につ  
いては、初出のみ原語を示している。本書末尾に索引を作成している  
ので、用語などについてはそちらを参照していただきたい。

## 目 次

### はじめに

- 触発し続けるゴフマン **渡辺克典・中河伸俊** i
- 1 本書のねらいと特色 i
  - 2 本書の構成 iv
  - 3 訳語について viii

### 第1章 アーヴィング・ゴフマンの社会学

- 理論内在的分析と現代的展開 **速水奈名子** 1
- 1 はじめに ゴフマン社会学の成立 1
  - 2 古典社会学とゴフマン理論 4
  - 3 「捉えがたい」ゴフマン理論の全体像 8
  - 4 ゴフマン理論研究の動向  
— 内在的・総合的分析をめざして 18
  - 5 ゴフマン理論を巡る新たな展開  
— 「身体社会学」と「アーカイブス調査」を中心に 20
  - 6 おわりに 25

### 第2章 ゴフマネスク・エスノグラフィー

- 渡辺克典** 26
- 1 相互行為という研究課題とアプローチ 26
  - 2 ゴフマンの記述スタイル 27
  - 3 シカゴ学派と社会調査 31
  - 4 実験室との対比としての日常生活 37
  - 5 反事実的な分析 42
  - 6 「科学的営為」としてのゴフマネスク 44

### 第3章 自己に生まれてくる隙間

——ゴフマン理論から読み解く自己の構成 芦川 晋 46

- 1 自己はどこにいる？ 46
- 2 自己が棲みつく隙間——2つの自己をめぐる 47
- 3 人物(人格)であるということ——パーソナル・アイデンティティ 52
- 4 生活誌の書き換えと社会的アイデンティティ 57
- 5 施設や組織への順応と役割距離 61
- 6 個人が人格(人物)であることと役割距離 69

### 第4章 「他者の性別がわかる」という、もうひとつの相互行為秩序

——FtXの生きづらさに焦点を当てて 鶴田幸恵 72

- 1 はじめに 72
- 2 Passing から Doing Gender へ  
——相互行為における性別に関する研究 74
- 3 情報伝達と秩序に関するゴフマンの議論 77
- 4 女／男に分かれているという外見の秩序からはみ出た存在である FtX の生きがたさ 81
- 5 おわりに 性別判断の記述におけるゴフマン概念の使い勝手  
——「性別を見る」という相互行為秩序の特性をとらえる 100

### 第5章 会話分析の「トピック」としてのゴフマン社会学

平本 毅 104

- 1 はじめに 104
- 2 ゴフマン社会学と会話分析 106
- 3 ゴフマン社会学と会話分析の近年の展開 120
- 4 おわりに 128

## 第6章 フレーム分析はどこまで実用的か

中河伸俊 130

- 1 フレーム分析の基本的な論点再訪 133
- 2 フレーム分析の使われ方と使い方——難点と可能性 138

## 第7章 引用発話・再演・リハーサル

——フレームの複合性と経験の自在性 南保輔 148

- 1 はじめに 148
- 2 引用発話——M.グッドウィンの少女の口論研究 148
- 3 再演——トークショーにおける引用発話 151
- 4 事前演技——プレスカンファランスフレーム 153
- 5 むすび 157

## 第8章 「ふつうの外見」と監視社会

永井良和 158

- 1 「儀礼的無関心」と「ふつうの外見」 158
- 2 「ふつうの外見」の更新と普及 161
- 3 つくられる「ふつうの外見」と操作の可能性 167
- 4 盗み見る技術 171
- 5 機械化と、都市的文明の衰退 182

## 第9章 修理屋モデル＝医学モデルへのハマらなさこそが 極限状況を招く

——アイデンティティの機能的差異をも論じたゴフマン

天田城介 188

- 1 「世界の様々な亀裂」をもたらす機能的差異  
——『アサイラム』最終論文の問い 188

- 2 『アサイラム』の三論文  
——極限状況で耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ 194
- 3 危うく脆くとも社会秩序を可能にする魔術的機能 204
- 4 ゴフマンの方法論の使い方 216

## 第10章 ゴフマンと言語研究

——ポライトネスをめぐる

滝浦真人 217

- 1 メジャーでないゴフマン 217
- 2 B & Lのポライトネス理論 218
- 3 自己-他者-自己…… 220
- 4 ネガティブ-ポジティブ 223
- 5 上-下——関係の非対称 226
- 6 これからのゴフマン 228

## 第11章 ゴフマンのクラフトワーク

——その言語人類学における遺産

高田 明 229

- 1 はじめに 229
- 2 社会的状況 (social situation) 231
- 3 関わり (engagement) 238
- 4 参与枠組み (participation framework) 246
- 5 まとめ 253

文献表 257

あとがき 279

索引 283

装幀——加藤賢一

# アーヴィング・ゴフマンの社会学

——理論内在的分析と現代的展開

速水奈名子

## 1 はじめに ゴフマン社会学の成立

第二次世界大戦後の社会学に、新たな地平を切り開いた「異才の」社会学者、アーヴィング・ゴフマン（1922-1982）。彼は生涯にわたって、日常生活における相互行為が人びとによっていかに経験され、そして組織化されるのか、その分析枠組みを探求し続けた。本章では、彼が提起した社会学理論の構造と、その現代的応用可能性について考察を深めていく。ゴフマンは、人びとの行為が決して社会構造や心理学的な特性に還元して分析できるものではないと考え、従来の行為論とは違った角度から——相互行為状況が独自に有する秩序のあり方を考察することから——、独創的な社会学理論を構築した。また彼は、相互行為独自の構造分析を、ドラマ論やゲーム論、そして時には動物行動学といった、多彩な観点を取り入れることから展開している。ここでは、このようなゴフマン理論の構造を分析することから、その応用可能性を検討していくが、それらの作業に入る前に、ひとまずゴフマンの社会学者としての経歴を簡単に確認しておきたい。

ゴフマンは、アメリカ、シカゴ大学出身の社会学者として広く知られているが、出生地はカナダ、アルバータ州のマンヴィルであり、この地においてユダヤ系ウクライナ人の両親から生を受けている。その後、移民局による統制や両親の仕事の都合から、住居をカナダ、マニトバ州のドーフィン、そしてウィニペグへと移したが、知的好奇心が芽生える青年期には、地元ウィニペグのマニトバ大学において、社会

学ではなく化学を学んでいた。

しかし1944年に、ゴフマンは突如、オンタリオ州のトロント大学に転学し、自らの専攻を社会学に転向したといわれている。ゴフマンがこのような選択をした理由について、ゴフマン研究者の Y. ヴァンカンは、「(ゴフマンが) 会員であったオタワの「カナダ国立映画制作庁」(National Film Board of Canada) での活動を通じて知り合いになった、製作者の D. ロングから、社会学を学んではどうかという誘いを受けたことが、一つの大きなきっかけになったのではなかろうか」[Winkin 1998=1999] と、言及している<sup>[1]</sup>。ロングからの強い影響、そして何よりゴフマン自身の「人間行動分析」に対する強い知的好奇心から、彼は23歳の時に社会学を学ぶことを決意する。

トロント大学では、C. W. N. ハートーや R. バードウイステルといった、人類学者から強い影響を受けることになるが、特にゴフマンはキネシクス<sup>[2]</sup>の創始者であるバードウイステルによる参与観察を基調とした授業に魅了され、文化と身体の関係性について考えを深めたといわれている [Winkin 1998=1999]。

翌年の1945年に、ゴフマンは大学院生としてアメリカに渡り、以降、この地を拠点に社会学理論の構築に専念していく。渡米後、彼はマージナルな環境で培った感性をもとに、独創的な社会学理論を提起していった。ゴフマンは、バードウイステルらの勧めにより、シカゴ大学に入学することを選択したが、彼が修士課程の学生として入学した1945年は、同大学が最も成熟しつつある時代であり、「シカゴ学派」の第三世代とされる、E. ヒューズや W. ウォーナー、そして H. ブルーマーらの主導のもと、アメリカにおける社会学の中心的役割を

---

[1] デニス・ロングはトロント(カナダ)出身の社会学者。コロンビア大学に学び、後にニューヨーク大学社会学部教授。パーソンズ理論を「現代社会における社会化過剰の人間観」(1961年)において批判した。

[2] キネシクス(kinesics)とは、バードウイステルによって考案された、身体表出を含めたコミュニケーション論を指している。



担っていた。シカゴ大学社会学部は1892年の創設以来、アメリカ社会における資本主義の発展がもたらした、多くの社会問題を分析するための経験的調査研究、すなわちエスノグラフィーにもとづいたモノグラフ研究のメッカであった<sup>[3]</sup>。当時、シカゴにはJ. デューイやG. H. ミードから受け継いだ「プラグマティズム」の思想が伝統的に定着しており、そこでは人びとの日常生活文化や常識を哲学的な問いとして捉える風土があったといえることができるだろう。

ちょうどその頃、ハーバード大学では、T. パーソンズ、K. クラックホーンらの主導のもとに、社会構造、文化、パーソナリティの理論を統合して行為の総合理論を構築するという試みがなされていた。当時のハーバード大学社会学部は、シカゴ大学とは異なり、ヨーロッパにおいて構築された社会学理論の内在的研究および、それらの統合を目指したグランド・セオリーの構築が進められていた。

また、シカゴ、ハーバード大学と並んで、コロンビア大学社会学部も、R. マートンによる「中範囲の理論」——一般理論と特殊理論（特定の事象のみを説明する理論）の両者を媒介し、分析手続きのパラダイム（たとえば機能分析のパラダイム）を理論化したもの——をはじめとした、理論と経験とを相互交流させるための研究が進められ、大学内に設置された応用社会研究所は世界的に注目を集めていた<sup>[4]</sup>。

---

[3] シカゴ大学が創設された当初から1929年まで、同大学における社会学と人類学は同一の学部に属していた。

[4] 1940年代から60年代にかけてのアメリカ社会学会の様子をよく知るJ. ガスフィールドによって記された以下のエピソードは、当時の大学ごとの「カラー」を明瞭に示しているのので、ここで確認しておきたい。「われわれはよくこう言っていたものである。飲酒についてハーバードの学生が学位論文を書くとするばおそらくそのタイトルは、『西欧の社会システムにおける文化的緊張緩和の様式』とでもなるだろう。コロンビアの学生なら、『全国のサンプルシステムにみるアルコール使用の潜在的機能』といったタイトル。そしてシカゴの学生なら『55番街のバー、ジミーズにおける社会的相互作用』となるだろう、と」[Gasfield 1995]。

このように、ゴフマンが大学院生であった頃のアメリカ社会学界は、これら三大学の個性が分かれており、各大学が互いに刺激を受けあいつつ、それぞれの独自の研究分野を発展させていたということができるといえる<sup>[5]</sup>。このような環境のなかで教育を受けたゴフマンは、ひとまず、経験的調査研究を志向するシカゴ大学の学生として、エスノグラフィを基調とした日常生活における相互行為の分析に関心を寄せていた。しかし、ゴフマンはこのような伝統を心得つつも、同時に個別的な経験の分析を越えた、いわゆる「普遍的な」理論を構築していくことに興味を持っていたようである。より正確にいうと、彼は日常的な相互行為を観察することから、それを可能にするメカニズムを理論化することに大きな関心を寄せていたといえることができる。

以下では、ゴフマンがいかなる社会学的思考のもとに、自らの理論を構築しようとしたのか、彼の理論にみることができるといえる古典社会学理論との関係性を検討することを通じて、確認していきたい。

## 2 古典社会学とゴフマン理論

ゴフマンは大学院生時代を、シカゴ大学において過ごしたが、当時、同大学社会学部において教鞭をとっていた、第二世代にあたる R. パークをはじめとした研究者たちは、ドイツ留学を通じて G. ジンメルによる諸理論を学んでおり——特に都市社会学理論に深く精通していた——、彼らは帰国後、それらを英訳し、主要な社会学理論のひとつとしてアメリカに広く浸透させた。

また一方で、シカゴ大学社会学部には伝統的に、プラグマティズムの思想にもとづいた科学的方法論が定着していた。周知のとおり同大

---

[5] 今日、アメリカにおける各大学の社会学部においては、当時のような個性はほとんどみられないが、カリフォルニア大学バークレー校を中心とした西海岸における大学の社会学部が、唯一「エスノメソドロロジーのメッカ」としての個性を有している [Lidz 2007]。

学社会学部は、これまで数多くのすぐれたモノグラフを世に送り出してきたが、それらの多くは G. H. ミードから受け継がれた、プラグマティズムの科学的方法論を基調とした、継続的なエスノグラフィーをもとに作成されたものであった [Cook 1993]。また、ミードの思想は弟子の C. W. モリスによって『精神・自我・社会』として体系化された後、G. ブルーマーによって受け継がれ、理論のさらなる定式化が進められた。

シカゴ大学において社会学的思考を培ったゴフマンは、当然、これらの思想に通じていたと思われる。しかし、ゴフマンは上述の思想に共通した主要概念である「相互行為」を分析の対象としたものの、相互行為状況を独自のシステムとして捉え、それを機能主義的な観点から考察する、という「特殊な」方向から自らの理論を構築していくことになる。以下は、ゴフマンが博士論文に記した一節である。

私の考えでは、ある対象を研究するにあたっては、各対象にまず正面から取り組み、対象をそれ自体一個の完結したシステムと考えることから始めなければならない。このバイアスが現代の文学上の構造主義にも認められるとしても、私が依拠する源泉は、それとは関係なく、デュルケームとラドクリフ＝ブラウンの機能主義である。この立場こそ学位論文で、対面的相互行為をそれ自体、一個独立の領域として取り扱うように私を導いたものである [Goffman 1953]。

このように、ゴフマンは自らの理論の源泉が E. デュルケームと A. ラドクリフ＝ブラウンの機能主義に基づいた思考に依っていることを公言している。ゴフマンは相互行為という、いわゆる「ミクロな」レベルに限定しつつも、相互行為状況という完結したシステムのなかで、相互行為秩序がいかなる機能のもとで維持されているのかを分析することに専念した。さらにゴフマンは、博士論文のなかでパーソンズ理論にも触れている<sup>[6]</sup>。彼は、パーソンズによって提唱された

グランド・セオリーからは距離を置いていたが、パーソンズが相互行為をひとつの独立した社会システムとして分類する方法には関心を示し、自らの理論に援用している<sup>[7]</sup>。ここから、ゴフマン理論の根底にはデュルケーム、パーソンズ理論から着想を得た機能主義的な発想が流れているといえることができるだろう。

このように確認してみると、ゴフマン理論は相互行為論をもとに展開された理論というよりも、むしろ「構造主義的な」立場から構成されたものであるように見受けられるが、この点についてもここで少し言及しておきたい。

先に確認した引用からも明らかなように、ゴフマン自身は自らの立場を「構造主義者」とは位置づけていなかった<sup>[8]</sup>。パーソンズ理論に引き付けて考えると、ここでの「構造」は制度化された価値や規範のパターンを指しており、この全体としての構造を維持するための機能として、制度的役割が想定されている。ゴフマンは積極的に構造という概念を用いないが、彼の理論における構造と機能の関係をあえて説明すると、前者は状況ごとに立ち現われてくる「状況的規範」を、そして後者は「状況的役割」を指しているといえることができるだろう。

---

[6] 「社会的相互行為を、社会の組織化あるいは社会的秩序というひとつの独立した単位として分類する仕方は、タルコット・パーソンズの『社会システム』（1951）に由来している」[Goffman 1953]。

[7] 同じ「相互行為」という概念であっても、パーソンズとゴフマンが想定する同概念には以下のような相違がある。パーソンズにおいては、分析的リアリズムに基づいたシステム理論の大枠として、一方に集合的価値が、他方に個人意識があり、その中間項として社会システムとしての相互行為の場があるが、このような構成をとることで、彼はデュルケームや M. ウェーバーのいった、集合的価値と個人精神やエートスとの関係を、相互行為論によって媒介しようとしていた。つまり、同理論における相互行為は、集合的価値が個人へと至る「通過点」としての役割と、3つのシステム全体を維持するための一機能を担っている、といえることができる。それに対して、ゴフマンは相互行為には相互行為秩序を巡る独自の構造があり、それを内在的に研究することに意義があると考えていた。